

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

華人の移動とその目的：世代・地域別比較の試み

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4507

一 華人の移動とその目的

——世代・地域別比較の試み——

陳 天璽

はじめに

中国語で「四海都有中国人」や「四海為家」というフレーズを見たり聞いたりすることがよくある。四海とは世界を意味しており、したがって前者は「世界どこにでも中国人がいる」、後者は「世界を家と為す」という意味になろう。これらの言葉から、中国人は世界中どこにでもおり、しかも、どこへ行ってもそこを自分の居場所とする傾向があることがわかる。中国人たちは国境を越え世界中に移動しており、海外に移住した中国人（おもに漢族）は華人と呼ばれる。本章では、「移動の民」ともいえる華人に注目し、彼らが移動することになった理由、そして移動することによってなにを手にいれようとしているのかなど、移動の目的を明らかにしてゆく。また、それらを出身地域別だけでなく世代別に比較・整理することを試みる。

具体的には、韓国、香港、アメリカの華人のケーススタディーを取り上げるが、それぞれ二〇世紀初頭、中国大陸

に国民国家が形成された時期以降に海外に移住し、現在に至る華人家族が主となる。これらの家族は、一世が中国大陸を離れてからおおよそ百年ほどたっており、三世代目や四世代目が社会でもっとも活躍する時期を迎えている。一方現在、一九七九年改革開放以降、中国大陸から大量に流出した中国新移民または新華僑と呼ばれる人々の移動も注目値するが、本論は華人の出身地域と世代別の複合比較を試みるという趣旨から、一世が移住して三〇年に満たない新華僑は今回本章の射程からあえて外している。また、本論では地域別に比較するが、ここで指す地域とは華人移民の中国大陸内の出身地、たとえば広東や福建などを指すのではなく、むしろ、一世が中国大陸を離れた後、移住先として最初に外国で定住した地を指しており、そこを基準にしていることもおことわりしておく。

華人移民史研究の第一人者として知られる王賡武 (Wang Jingwu) は、華人の移動を華商型、華工型、華僑型、華裔型の四タイプに分類した「王 一九九一」。筆者は、これら四つの類型と照らし合わせながら北米、香港、韓国出身の華人に注目し、彼らの移動の理由と目的を世代別・地域別に複合的に比較してゆくことで、華人の移動の特徴を明らかにしてゆきたい。

1 世界における華人の概況

(1) 華人の定義と人口の分布

中国国外に居住する中国系の人々は華僑、華人などと呼ばれている¹⁾。法的に厳密に区別し定義した場合、華僑とは依然として中華人民共和国や中華民国の国籍を持つ者、つまり法律上「中国人」でありながら、中国国外に生活基盤がある人々を指している。加えて、中国以外に居住し、いずれの国の国籍も持たない無国籍の中国系の人々も華僑と呼ばれる。一方、華人とは、中国以外の国に居住し、すでに中国以外の国籍を取得した人を指している。このように、

国籍によって区分した定義は理解しやすいが、実際、中国系の移民のなかには複数の国籍を有している者もいれば、外国の国籍を取得しても当事者自身が自らを「華僑」と称することがあるなど、華僑と華人の区別は極めて不確実かつ曖昧であるのが実態である。よって、ここでは、華人をより広義な意味で使用する。広義とは、海外に渡った中国系の人々を国籍の区分なく、包括して華人ととらえるということである。また、海外に移住したのち、もしくは世代を重ねたあと、中国大陸に逆流し定住している人々も華人と呼ぶ。

華人は流動性が高いため、彼らの人口を把握することは難しい。統計によっても異なるが、全世界におおよそ三千万人ほどの華人が散在しているといわれている。そのうち約八割半を占める二千六百万人ほどが東南アジアにある約三〇カ国・地域に居住しており、そのほか、全体の一割に当たる約三百万人の人々がアメリカ大陸にある三二カ国に居住しているとみられている。その内訳として北米に二百万人、南米に百数十万人ほど分布していると推測されている。そのほか、ヨーロッパには約八〇万人、そしてオセアニアには五〇万人、そしてアフリカに一〇数万人ほどの華人が居住していると推定されている。

華人の全人口の六割をしめる人々が、インドネシア、タイ、マレーシアの三カ国に集中している。インドネシアには七百万人、タイには六百万人、マレーシアには五五〇万人ほどの華人が居住している。そのほか、五〇万人以上の華人が居住している国々は、シンガポール、ベトナム、ミャンマー、フィリピン、アメリカ合衆国、カナダ、そしてペルーである。以上の一〇カ国で華人全人口の約九割を占めている。

一九八〇年代以降、アメリカ大陸、オセアニア、そしてヨーロッパに居住する華人の年平均増加率が、それぞれ八%、八・五%、三・二%となっている。一方、アジアの増加率は二・四%、そしてアフリカは二・一%となっている。華人の移民が減少傾向にある国は少なく、最も華人移民が減少傾向にあるのは韓国で、その増加率はマイナス七%となっている〔僑務委員会 一九九一、李・陳 一九九一、賈・石 二〇〇七〕。

(2) 地域別にみる華人移民の特徴

世界に散らばっている華人たちは、当然のことながら意識や立場も一括りにできるものではない。居住している地域、そして移動した社会によって経験した歴史もきわめて多様である。

人口の八割が華人であるシンガポールにおいて、華人は政治の中枢に存在しており、華人が多数派である唯一の国である。シンガポール以外の国々では、華人はエスニック・マイノリティとしての立場を有している。他国に比べ、国の全人口に対する華人の人口比率が高いマレーシアでも、華人は全人口の三割ほどである。なお、マレーシア華人は、「ブミプトラ」と呼ばれるマレー人優位政策により公的・政治的な舞台での活動が制限されている。しかし、マレーシア華人は、名前、学校、政党、テレビやラジオ、新聞など、華人としての特性や文化を保持することを認められており、中国系の要素が色濃く残っている。

インドネシアは華人人口が七百万人いると見られ、世界最大の華人人口を抱えた国である。華人は絶対数からみると多いが、全人口比率としては、四パーセントに満たない少数派である。一説には、マイノリティである華人が、インドネシア経済の八割を牛耳っているといわれている〔朱 一九九五〕。スハルト時代、華人は政治・文化など各活動が制限され、華語や中国名の使用も禁止されていたが、経済活動の場では自由を与えられた。スハルト政権崩壊後、インドネシアにおける華人社会も大きく変わり、華人の文化活動や政治参加などだいぶ自由化されている。

東南アジアの華人は、一九世紀末や二〇世紀初頭など、比較的早い時期に移民した者が多い。第二次世界大戦後、一九四九年に新中国が成立し共産政権のもと、諸外国との交流はしばらく制限された。ちょうどその時期と重なり、東南アジアの旧植民地が独立する一九七〇年代頃までの間、東南アジアへ華人移民が継続的に流入することは少なく、むしろ断絶していた。

一方、アメリカやカナダ、日本などの先進国は、戦前に続き戦後も華人移民が絶えることはなかった。しかし、戦後から一九七〇年代までの移民は、中国本土からではなく、香港や台湾から移民した者が多数を占めた。多くは留学を経て就職し、その後、現地に生活基盤を築き、華人となっていくた人たちである。こうした人々の多くは高等教育を受けたエリート層であり、先進諸国への移住を目指す者が多かった。また香港や台湾を経由してきたことなどから、戦前に華南一帯から直接移民し、チャイナタウンに根付いて暮してきた華人とは、多少なりとも差異があった。

その後、また移民の大きな潮流がある。それは一九八〇年代以降、中国の改革開放によって、中国本土から流出した人々である。彼らは新移民と呼ばれている。人口の面でも、目的地の面でも、規模が大きく目を見張るものがある。彼らは、新中国成立後、中国に生まれ育ち、さらに国民教育を受けるなど、近代国家としてのシステムを有した中国での生活を経験している。よって彼らは、早期に移住した「老華僑」と呼ばれる移民たちとは、ナショナルリズムやアイデンティティなど、意識的な面で差異がある。その一例は、結社のあり方や組織活動から垣間見ることができる。老華僑が移民した時代、政府機関や大使館など、「国民」として頼ることができる組織はまだ十分機能していなかった。そのため、彼らは出身地や同族関係のつながりを利用し相互補助組織をつくることで、権益の保護や要求、その他のニーズを満たした。一方、現代に入り中国から移住した新移民たちは、中国大使館など公的機関によって、一定のサービスや情報を提供されている。そのため、老華僑が主に依存した同郷会や宗親会などは、新移民にはあまり重要視されておらず、むしろ、学縁や業縁組織のように、同じ出身校であるとか、同じ専門業種であるなどの理由から結成されている組織が増えている。

2 華人の移動の歴史的変遷と四つの分類

華人の海外への移動が本格化したのは、アヘン戦争以後であるといわれている。アヘン戦争を機に、大量の中国人が海外に流出した背景には、中国内部の経済的、社会的貧困というプッシュ要因と、欧米諸国の奴隷制廃止と西洋列強の植民地における労働力の需要というプル要因があった。この頃、中国（清朝政府）では、広州、廈門、福州、寧波、上海の五港で通商が行われ、西洋の人々は、これらの地で洋行を設立し、貿易を拡大するだけでなく、労働力の販売も行っていた。西洋宗主国の指導者たちは、東南アジアの植民地に到着したあと、現地の資源開拓のため大量の労働力を必要とした。

一方、アヘン戦争から今日に至るまで、華人の海外移住を考えた時、大きく三つの原因をあげることができよう。一つは、政治的な原因による海外への移住。王朝による悪政、国内における政治的混乱、民主化の要求や人権の主張など、政治イデオロギーにおける政府との意見の不一致や戦乱の結果、海外に安住の地を求めて移動した人々があげられる。二つ目として、経済的な困窮や自然環境の悪条件により生活が困窮し、出稼ぎを余儀なくされた者が海外に労働の機会を求めて移動したことがあげられる。第三としては、商人が貿易や事業の拡大、もしくは事業を起すために海外に渡るケースである。これは上記の二つの原因が、経済的・政治的に逼迫し出国の道を選ばねばならなかった消極的な理由による移動と比較すると、ビジネスチャンスを求める中・上流階級の者に見られる、いわば積極的な理由による海外への移動ととらえることができる。

王賡武は仕事や生活のために中国本土を離れ海外に渡った中国人を広く華人移民と捉えている。一八世紀以降から今日までの約二世紀の間に移動した華人たちに注目すると、華商型、華工型、華僑型、華裔型と大きく四つのタイプ

に分類することができるという〔王 一九九一〕。以下では歴史的な環境の変遷なども含めて、これらのタイプを概観してゆく。

(1) 華商型 (The Trader pattern)

華商型に分類される華人たちは、貿易など商売を目的に出国した商人、技術を持ち仕事のために出国した職人・技術者、そして彼らに同伴して派遣された人々やその家族などが含まれる。こうした人々たちの多くは、港や鉱山、あるいは商業都市において商売やビジネス業務をする基盤を立てた。一五〇年前に開港した横浜の歴史を振り返ってみても、最初に来日した中国人は、西洋人と日本人の商売の仲立ちをする買弁であった。開港場において、彼らは西洋人と日本人の意思疎通のため不可欠な存在であり大いに活躍した。買弁のほかに来日した中国人は、西洋人の生活に必要な技術をもった職人たちであった。多くがビジネスのために移動した人々であることがわかる。

華商型の多くは、東南アジアや日本などに赴いた。事業で成功した商人たちのなかには、ビジネス遂行上の方便を考え現地社会の名門に仲間入りすることもあったが、依然として故郷にいる家族や郷里の人々との連絡を維持し事業に役立てることもあった。それはビジネスを後世に継承させ、郷里からの人の移動を促すことになり、またビジネスをさらに拡大させることにもつながった。

華商型の華人には、特に、日本、フィリピン、ジャワに移動した閩南の商人、ボルネオに移動した客家の商人、そしてタイに移動した潮州の商人などが知られている。このタイプの華人たちは歴史的に見ても最も古く、また、一八五〇年代までの華人の移動を促す最たるものであったとみることができる。

(2) 華工型 (The Coolie Pattern)

「華工」とは中国系労働者を指し、英語名にも表れているように「苦力 (Coolie・クーリー)」と呼ばれる契約労働者たちである。多くは農村で土地のないまま労働をしていた貧しい人々であり、組織的、かつ大量に契約労働者として海外に移動したことで知られている。

一九世紀半ば、西欧諸国が東南アジアの植民地に到着した後、現地の資源開拓のために大量の労働力を必要とした。西欧のこうした労働力の需要に応えたのがインドや中国の労働力であった。また、同じ時期に、アメリカ、カナダ、ラテンアメリカなどでは工業化の時期にあたり、山での金鉱採掘や鉄道・道路建設など近代化のため、廉価で勤勉な労働力を必要であった。アメリカでは奴隷制が廃止されたこともあり労働力を海外に求める必要が生じた。その労働力の供給源となり、仕事をもとめて移動したのが華工たちであった。

仕事を求めて故郷をあとにした華工たちは、福建や広東一帯の出身者が多い。彼らの出身地は人口が多い割には土地が小さいため労働力過剰という問題を抱えていた。故郷での生活苦を解決するため出稼ぎという形で海外に渡る男子が多かった。彼らは労働力として売買され、奴隷や豚のような扱いを受けたといわれている。彼らを「豚仔」と呼称することからもその様子がうかがわれる。また、華工たちの売買は組織的に行われていたことから、それは「苦力貿易」ともいわれた。

華工たちは、山の掘削や道路建設など激しい労働にもかかわらず賃金は安く、過酷な生活条件のもと働いていたといわれている。しかし、こうした仕事にたどり着けた華工はまだ幸いな方で、なかには、目的地向かう数カ月の船旅の間、船にすし詰め状態にされた劣悪な環境のなか死に絶えてしまう人々もいた。華僑史研究で残されている資料によると、一九二五年までに華工として海外に移動した三百万人の華工のうち、激しい労働や船上で死亡したもの

は一三〇万に上った。そのためか、彼らを運搬する船は「浮き地獄」と呼ばれていた〔馮 一九九三〕。

華工として海外に移動した人々は、おもに男性であった。さまざまな苦境を乗り越え一定の貯蓄をためた後、故郷に戻る者もいれば、現地に根を下ろす者もいた。

(3) 華僑型 (The Sojourner Pattern)

華商型や華工型がビジネスや仕事など経済的な目的をもとに移動したのと異なり、華僑型の人たちは、華僑という名称にも表わされているように、中国に対し政治的、法的、文化的なアイデンティティを強く持っていた移民である。華僑学校の教師として海外赴任する者もいれば、海外の華字新聞の記者、そして中国の文化や思想を海外に広める効果をもたらす人達も含まれる。もともと華商や華工として海外に渡っていた人々のなかには、のちに華僑型の人たちが発行する新聞やコミュニティでの活動に影響され、中国人としてのアイデンティティに目覚め取り込まれていく者もいた。

もともとは、華商として海外に赴いたが、政治イデオロギー、そして中国人としてのアイデンティティに目覚め、祖国の建設のために力や金を惜しまなかった人もいる。たとえば、「愛国華僑」と呼ばれ広く知られる陳嘉庚がいる。彼は、居住地であった東南アジアにおいてゴム農園を持ち、「ゴム王」と呼ばれるほど大きなビジネスを築き上げた華商であったが、日中戦争のもと祖国中国を支援するため、東南アジア全域を移動し支援活動を行い、また自ら抗戦のため中国に渡った。

こうした華僑型に含まれる人々の特徴は、イデオロギーや政治的な意識に敏感であり、民族主義、愛国主義に熱心であることだ。一九世紀末から二〇世紀に入り、海外との接触が増えてゆく一方で、各地では近代国家が形成され、人々は国家の存在を意識するようになっていた。封建主義のもと中国の国力が衰退していくなか、人々は民主化・近

代化を求めた。民主国家建設を謳い、政治宣伝のため世界各地を移動した孫文は、まさにその代表的な例である。孫文が一九一一年に、アジアで初の近代国家の建設に成功すると、人々の政治的アイデンティティは絶頂を迎え、その後日中戦争、そして第二次世界大戦など、人々をめぐる国際環境では政治色が絶えず濃厚であった。それに伴い華僑学校建設による民族教育の促進、海外華人コミュニティでの権利取得を目的に、華僑型の移動が一九五〇年代から増えていった。

(4) 華裔型 (The Descent or Re-migrate Pattern)

これは比較的新しいタイプの移動ととらえることができる。華裔とは、中国の血統を有する外国人を意味する。厳密には中国以外の国で生まれ育った者で、すでに外国の国籍を有している者を指している。ここであげる華裔とは、前に述べた華商、華工、華僑で、のちに現地国の国籍を取得した人々を指すのではなく、むしろ、華商や華工、華僑の子孫として居住地に生まれ育ったが、その居住地から他の地に再び移民している人々を指している。

一九七〇年代以降、東南アジアに生まれた華裔たちが、アメリカやイギリス、オーストラリアなど欧米諸国に再移民するというケースが多く見られる。その原因として、華人たちの居住国における、民族差別や厳しい排外政策の施行があげられる。たとえば、インドシナは政情が不安定であったことが影響し、多くの華人が難民としてアメリカやフランスをはじめとする国々に再び移動した。欧米の国々のチャイナタウンにおいて、ベトナム料理店が軒を列ねていることや、アメリカでインドシナ出身者向けの華字新聞『越棉寮報』²が発行されていることから、東南アジアから再移民する華人の動きを伺うことができる。また、マレーシア、インドネシア、フィリピンなど東南アジアの華人は、かつて居住地において華人排斥運動があったことや、「プミプロ」政策など現地の人を優遇する政策があったため、子弟を海外に留学させ活動範囲や選択肢を広げることで差別に対応した。子弟は留学後、現地にとどまり市民

権や国籍を取得し、活動拠点を増やすことによってリスク対策を行っている。それが、ファミリービジネスの拡大に繋がっているケースも見られる。

華裔型の移民で注目すべき特徴の一つは、国家に縛られずコスモポリタンの感覚を持った人々が多いという点である。高学歴者や専門的な知識を持った者が多く、たとえば、医師、建築家、弁護士、会計士、大学教員などが含まれる。こうした人々は専門的な知識を身につけており、言葉を換えれば手に職があるためどこに移動しても生きる術を持っている。また考え方もリベラルな傾向にある。こうした人々は、自分がより住みやすい環境、自分の権利がより守られる環境を求めて再び移民しており、なかには国籍を二度、三度と変更している者もいる。もちろん複数の国籍をもち、各地に分散して暮らす家族のもとを往来する者もいる。こうした人々の移動は、家族や社会、さらには国家のあり方に大きな変化をもたらしている。

3 ケーススタディーから見る華人の移動の目的

これまでの先行研究では、カナダ、東南アジア、日本など特定の国や地域に限定して、華人の移動のあり方や変遷を歴史的に分析するというのが一般的である〔李 一九九二、李 二〇〇〇、劉 二〇〇三〕。特定の家族に注目し、数世代を対象に分析する際、居住国への同化やアイデンティティ、または文化の変容に注目した研究が主であり、世代によって、移動のあり方がいかに変わったのか、もしくは移動の目的がどのように変わっているのかに注目した研究はあまりなされてこなかった。さらには、世代間の比較のみならず、出身地域別に複合的に比較するという試みもされてこなかった。ここでは、世界各地に分散している華人のなかから、特徴的な動きをしているいくつかの華人家族に注目し、その家族の間で世代別にいかなる移動をしているかを見ていくことによって、地域別・世代別にみられ

る華人の移動とその目的を比較分析してみたい。⁽³⁾

(1) アメリカの華人——太平洋の向こうに見える夢
魅惑の「旧金山」へ赴く一世たち

アメリカのサンフランシスコは太平洋側に位置する大きな港町で知られている。同市は中国語で「三藩市（サンファンシ）」または「旧金山（ジョウジンサン）」と呼ばれる。「三藩市」はサンフランシスコの音を漢字であてたものである。一方、「旧金山」と称されるのは、一九世紀半ばゴールド・ラッシュの時期に、多くの華人移民が一攫千金を夢見て海外に渡る際の目的地だったからだ。当時、中国からアメリカにわたる際、船が唯一の渡航手段であった。中国で多くの華工を乗せた船は沿海地域から日本の港を経由し、サンフランシスコを目指し太平洋を横断した。家族をおいてでも遠く離れたサンフランシスコへ出稼ぎに渡ったのは、彼の地が一攫千金の夢を実現することができる「黄金の山」だと信じられていたからであろう。

そのころ、アメリカへ渡った華人のほとんどは華工型の移民だった。彼らは親戚や同郷、もしくは商人などを頼りさまざまな方法で故郷との連絡を維持した。しかし、二度の世界大戦という国際情勢の混乱、そして地理的な理由から遠くにある故郷に戻ることを断念し、アメリカに根を下ろした者は多かった。アメリカは増え続ける華工の移住と市民権の取得を制限するため、一八八二年に中国人排斥条項を制定した。その影響もあり、華人たちの社会的な地位はさわめて低かった。第二次世界大戦終了後、アメリカはこれまで実施してきたアジア系移民に対する差別的な移民政策を緩和した。一九六五年に制定した新しい移民法に伴い、アジア系移民に対する差別的な政策を一掃した。

そのため、戦後になると、台湾や香港からたくさんの華人がアメリカに移住した。一九五〇年から一九七九年の約三十年間、香港から約二十万人、台湾からは十二万人ほどの華人移民がアメリカに移住したといわれている。一方、

この間、中国大陸は共産主義化し、国境を閉鎖したため中国大陸から海外へ渡るものは極わずかであった。

台湾や香港からアメリカに渡ったものは、政治イデオロギーの薰陶を受けた知識人が少なくなく、いわば華僑型の移民が多かった。そのほかに多かったのは、よりよい教育を求めて欧米に留学する青年たちであった。当時、留学を目的に海外に渡ったものの、アジアと北米での賃金格差、そして、アメリカでの移民政策の緩和などの誘引から、結局、現地で市民権を取得し、アメリカに根を下ろす人々が少なくなかった。台湾から留学のため北米に移り住んだ人たちは台湾生まれであるため「MIT (Made in Taiwan)」と呼ばれた。また、台湾出身の留学生は、一般的に理系や技術系の進路を好む傾向にあり、理系に強いマサチューセッツ工科大学の略称「MIT (Massachusetts Institute of Technology)」にももじられていたのである。

「新金山」に逆流するアメリカ生まれの華人

戦前中国本土から華工型で移住した一世たち、また、戦後台湾や香港を経由しアメリカに渡った華僑型の移民一世たちは、移住の時期や目的の違いはあれども、アメリカに根を下ろす者が多かった。こうした移民一世たちのもと、アメリカに生まれた子弟は、アメリカの国籍法が生地主義を採用していることから、アメリカ国籍を取得した。そのため法的にはアメリカ国民として平等に扱われる。しかしアジア系移民が社会的・民族的マイノリティであるの是一目瞭然である。社会的地位を確保するため教育を重んじる華人は多かった。華人たちは世代を重ねるごとに教育水準、生活水準を向上させた。また、新しい世代は専門的知識を身につけ、高等教育を受ける傾向にある。比較的安定した職が確保される医師、エンジニアになるものが多くみられ、なかには修士号や博士号を取得する者もいた。こうしたアジア系移民でアメリカ生まれの中国系は「ABC (America Born Chinese)」と呼ばれている。彼らは、中国語よりも英語を話すことを好むことから、こう比喩されるようになった。

戦後になると、アメリカの華人は法的な地位を有し、また二世三世が高等教育を受けたことから、一世たちの間にあった華工としての社会的に比較的低い地位ゆえのコンプレックスはだんだんと消えていった。MITやABCと呼ばれる華人たちも、アメリカ国籍を有し、専門的な職業につく人が増えたため、アジア系アメリカ人としてのアイデンティティを持ち、社会において不自由なく暮らしている。しかし、いくら高い学歴でもアジア系として白人社会のメインストリームに入るにはさまざまな面で努力が必要である。大企業に入れたとしても、時には昇進を妨げる目に見えない壁があるといわれる。ならば、自分の特徴を行かせる場所で勝負をしよう、成長真つ只中のアジアでビジネスチャンスをつかもうとする動きがあり、その結果、「旧金山」があるアメリカから、「新金山（新しい金の山）」を求めてアジアに逆流するケースが一九九〇年代から見られるようになった。

ラリーはそうしたアジアに逆流するABCの先駆けである。彼は、ノース・キャロライナに生まれた華人移民の三世である。アメリカに生まれ育ち、中国語は祖父母と話す簡単な日常会話を理解する程度で、あとはほとんど英語を話して育った典型的なABCである。一九八五年、二十五歳のとき、祖母に連れ添って初めて中国へ旅に出かけた。そのとき、祖母の「祖国」である中国は経済成長し始めた頃であり、これから発展する可能性とエネルギーを持ちあふれていることをラリーは目の当たりにした。当時、大学を卒業し、エンジニアとしてロサンゼルスで働いていた彼は、このままアメリカの会社で働き続けてもよいが、将来に期待を持てずにいた。むしろ、ABCとして生まれた自分の特性をもっと生かすことはできないかと考えていた。祖母と旅をしている間、アジアにおいてなら、ABCとしての自分の特性を生かせると同時によりよい機会を獲得できるのではないかと感じた。その結果、彼は仕事を辞め大学院に戻り企業経営学（MBA）を学びながら、中国語を勉強した。夏は、数ヶ月間台湾へ渡り中国語の集中講義を受けながら、アジアでの就職情報や企業の情報を集めた。

独自性とやりがいを求めて

「アジアの成長を目の当たりにし、アジア系アメリカ人として何も感じないわけがないでしょう」とラリーはいった。⁽⁴⁾ 彼は、八十年代半ばアジアに成長の可能性を見出してから、アジアで職を探そうと思っても、なかなか十分な情報や資料がなく困難な経験をした。しかし、「バイリンガルで、バイカルチュラルな自分のバックグラウンドはアジアで必要とされるに違いない」とあきらめなかった。

「どんなにアメリカが自由で平等な国であるといっても、アジア系であることで限界を感じさせない社会ではない。一定のところまで来ると『ガラスの天井』にぶち当たるんだ」とラリーは言う。「ガラスの天井」とは、アメリカの会社におけるマイノリティの昇進状況を表す際に使われる表現である。一見、誰でも制限なく平等に昇進できるように見えるが、実は白人以外の者には限界があるという。ラリーが集めた資料によると、アジア系はアメリカ人の人口の三％に相当する。そして教育水準に関してみると、アジア系は比率からして白人の倍から、一・五倍以上も学士を取得している割合が高い。しかし、大企業における上層レベルのマネージャーの比率は九七％が白人によって占められており、アジア系が占める比率は〇・三％に過ぎないという [Wang 1998]。ラリーは彼と同じように、アジア系アメリカ人として育ち、「ガラスの天井」による限界を感じている友人とともに、自分たちがつもつとも評価される環境はどこであり、やりがいがある仕事は何かと考えた。そして、チャイニーズ・アメリカンであるというアイデンティティに立ち返り、多文化の背景や複数の言語能力などの独自性を生かした仕事をしようということで、一九九四年、台湾において人材派遣会社を設立した。

彼らが設立した人材派遣会社は、アメリカなど西洋で教育を受けながらもアジアで仕事を探す人々に、アジアにある会社の情報やアプローチの仕方などを紹介するとともに、アジアの市場や生活に関する情報を提供している。一方、企業側には、必要な専門知識を身につけ、しかも言語能力、文化的な適応力を持った人材を紹介している。北米

で高等教育を受け、専門知識や技術を身につけたアジア系移民や、留学生などだ。人材の必要条件は、英語のほか中国語などアジアの言語とのバイリンガルであること、そして西洋だけでなく中国語圏の文化に対する理解と適応力があることだ。以上のような条件を持つ人に中華文化圏（中国、香港、台湾、シンガポール）などでの仕事の紹介をしている。

「いま、自分が中国、台湾、香港などで行っているビジネスは、祖父の願いであつた祖国への社会貢献でもあるような気がする」とラリーは中国的な一面を見せた。彼の祖父が華僑型の移動でアメリカに渡り、父がそれを継いでアメリカでの基盤を強固なものにし、その恩恵を受けた孫である自分がグローバルな市場のなかでも祖父の祖国である「中国」を選び、ビジネスで成功の道を模索しているというサイクルを描きながら、ラリーは「自分は西と東の橋渡しをする仲介者の役割を持っている」と語った。ラリーは確かにアメリカ人としてのアイデンティティを持っているが、華人としての自覚もある。移民家庭に生まれ当然のように多文化な環境に身をおいてきた。それゆえアイデンティティの模索もした。その結果アジアにも渡り中国語も学んだ。彼と同じように、アジアに逆流するアメリカ生まれの華人は増えており、目を見張るものがある。留意すべきは、彼らがアジアとアメリカを橋渡しするとしても、「中国に対する貢献」というかつての一世たちが抱くような国家に縛られた情念はない。それよりも、むしろ一世たちに対する思い、居住国でのコンプレックスと自分の「根っこ」の模索、そしてなによりも中国の経済発展のなかにビジネスチャンスを見出したからこそ、逆流しているのである。

(2) 香港の華人——政治の翻弄からの解放をもとめて

香港返還と「移民潮」

一九七〇年代から九〇年代、香港や台湾では政治不安が原因で北米に移民する人が多くいた。香港から移民を

推し出す大きな要因は、一九九七年の香港返還だった。⁶⁾一九八四年二月に「英中共同声明」が調印され、香港が一九九七年七月一日をもってイギリス総督府より中国に返還すると決定されると、香港からの海外移住者はいっせいに増えた。またその後、一九八九年に北京において「天安門事件」が勃発し、これら一連の事件が香港の人々に大きな不安と恐怖感を与えることになった。正直、香港人はみな、「中国に返還された後、われわれの生活はどうなってしまうのか。万一のため逃げ道を準備せねばならない」と考えた。その結果、香港では「移民潮」といわれるほど、北米やヨーロッパなどに向かう人の移動の波が起こった。年に約二万人の人が香港から海外に移住した。

香港はイギリス領であったため、宗主国に安住の地を求める人もいれば、カナダに赴く人たちも多かった。当時、「投資移民」が流行し、カナダに二〇万米ドル投資すれば、永住ビザを取得することができた。バンクーバーは香港からの移民が急増し「ホンクーパー」ともじられるほどであった。当時移住した人々は、専門的な知識をもつ高収入の中産階級や富裕層に多く見られた。香港のテレビ番組が香港の若者に対して行ったアンケートによると、三七%の人が海外に移住するつもりがあるとし、そのうち目的地として英語圏をあげたものが九〇%に達した。目的地としてもっとも人気があったのは、アメリカ（四一%）、カナダ（三五%）、オーストラリア（二〇%）、そしてイギリス（七%）であった[張・陳 二〇〇二]。香港からの華人移民の流れは一九九七年に行われた香港返還まで絶えなかった。

彼らの移動の目的は、いうまでもなく、安心できる国で市民権を獲得すること、いざというときに安全な居場所を得るためであった。一方、経済活動のため、ビジネスの拠点はあくまでもアジアに残す人が多かった。アジアにはビジネスの拠点を、そして、子の教育や家族の生活の拠点は北米において、アジアと北米を頻繁に往来する人々が増えた。その人たちは、中国語で「太空人」、もしくは「空中飛人」と呼ばれている。太空とは、中国語で宇宙という意味があり、アジアと北米を頻繁に行き来する華人たちは、飛行機に乗って空中を飛んでいることが多いので、このよ

うに喩えられた。

市民権と教育を手に入れる意味

程一家は「太空人」の一例である。程萬心は香港に在住する華人である。香港では貿易業、フィリピンでは鉱業、オーストラリアでは不動産業、北米では金融業に従事している華商である。彼は一年の大半を海外で過ごし、ビジネスの拠点を転々とする。まさに世界を股にかけて移動しており、華商型の移動と捉えることができる。

程は、広西とベトナムの境にある小さな村に生まれたベトナム華人である。八歳までベトナムで育ち一九五四年に香港に移住した。彼の「祖父は孫文を追隨する忠誠な国民党員であり革命活動にも積極的に参加した。祖父は孫文の死後、中国を離れ香港で教育活動に従事した」⁷⁾ そうだ。いうまでもなく、祖父が香港へ渡ったのは、政治や国際関係が影響した華僑型の移動であった。一方、父は、共産党員としてスパイ活動をしており、彼は幼い頃から中国の内乱を身近に感じて育った。その影響もあってか程は、「どこかの国や政府に頼つてはいけない。自分で自力更生する能力を持っていることが何よりも大切である。自立することによって自由な立場を獲得するからだ」⁸⁾ という。

家庭のなかで政治に翻弄された経験も持つ程萬心が、台湾に移住せず香港に留まった理由の一つは、イギリスの植民地であった香港が台湾に比べ政治的には中立を保てる立場にあったからであるという。彼の香港のオフィスに飾られてあった江沢民や李登輝、そしてリ・クワンユーなどの写真からも、その本音がうかがえる。しかし、一九八〇年代に入り、香港の中国への返還がいよいよ現実となると、また政治に翻弄されかねないという不安がぬぐえなかった。そのため、程は早い時期から、海外各地にビジネスを分散し、香港で生まれた子どもたちの市民権の問題や将来を考え、教育にも投資した。

程の末娘は、程がアメリカへ事業進出した際にアメリカに渡った。彼女は、アメリカの大学で学び、卒業後、数年

間アメリカの企業で働いた。その間、もちろんアメリカの国籍も取得している。アメリカ国籍を取得したことは、彼女の「香港人」としてのアイデンティティに特に大きな影響を及ぼすものではなかったようだ。むしろ、香港がいざとなったときに、アメリカに帰る場所があるという保険のようなものである。というのも、彼女は、アメリカで数年働いた後、経営学修士号(MBA)取得のためアメリカの大学院で学び、一九九八年大学院を卒業すると、次の活動の舞台として選んだのは香港だったのである。このとき、すでに香港は中国に返還されており、政治的に大きな締めつけがないと判断した結果の選択であった。彼女の場合、香港がだめならアメリカに戻る選択股も残されており、また、専門的な知識を身につけているため特定の国に縛られることもない。むしろ、生活の質や自分が居心地のよいところを求めた華裔型の移動を行っている。

高齢者の移動の本音

程一家のほかにも、一九七〇年代、香港からカナダに渡り現在レストランを経営している麻家族にもインタビューを行った。現在働き盛りである五〇代後半の麻は、三〇年前香港で料理人として働いて貯めた資金を移民につき込んだ。投資移民として妻とカナダに渡りモントリオールを永住の地と決めた。移住後、二人の子供に恵まれ、香港にいた両親たちをカナダに呼び寄せた。麻の店は、現在モントリオールにおいて、多くの人が知る有名店である。郊外に大きな家を持ち不自由のない暮らしを送っている。

そんな麻は現在、レストラン経営のほか、毎日の日課はペットの面倒だそうだ。二〇年前に両親をカナダに呼び寄せたが、高齢となった両親は、気候が寒いことや娯楽(友人やテレビなど)が少ないことを理由に、年の半分以上は香港に戻っている。しかし、カナダの方が老後の福祉が良いため医療などは主にカナダで受けている。一方、二〇代後半の娘たちは、カナダで働いており、香港に行くのは祖父母の付き添いや親戚で集う時くらいだ。

同じ香港から北米に渡った移民であるが、程一家が世代にかかわらず頻繁に移動するのに対して、麻一家は、どちらかというところからカナダに移動したのはカナダを永住の地としている。麻一家でむしろ興味深いのは、高齢となった祖父母たちが医療福祉のためカナダにいるが、療養や家族・友人との再会を理由に頻繁に移動をしていることだ。なお、香港からの移民である両家に共通していたのは国籍・市民権など法的な安定を目的に移動していることである。

(3) 韓国の華人——排除と包摂

世界で唯一チャイナタウンのなかった国

二〇〇九年現在、韓国に居住する華人は二万人ほどだと見られる。中国の隣国でありながら華人移民の人口が少ないことで特徴づけられよう。それは、「世界で唯一チャイナタウンのない国」や、「韓国は世界で唯一華人が成功しなかった国」と比喩されるほどであった。しかし、一九九〇年代後半、韓国仁川にチャイナタウンを再建するということで、海外の華人や中国に向け投資の呼びかけが盛んに行われた。実際、二〇〇〇年に入ると、仁川駅前には立派な牌楼が立てられ、チャイナタウンは観光スポットとして整備された。中国人の投資移民の誘致も行われている。現在、仁川には三六〇〇〇人の華人が暮らしている。

韓国における華僑・華人の歴史は、一八八二年 清国軍とともに、四〇人の商人が渡来したことに始まるといわれている。「尹 二〇〇五」。清国と朝鮮との間で、「朝清商民水陸貿易章程」が締結されると、清朝から多くの華商たちが朝鮮半島に渡り商売を行った。華商が急速に増加し、経済的にも発展したため、清朝の商務委員と朝鮮との間で交渉が行われ、その結果、一八八四年四月、中国が外国で初めての租界地を持つこととなった。中国の租借地と定められたのは、仁川の善隣洞一帯五〇〇〇坪の土地であった。日本人はこの地域を支那町や弥生町と呼び、一方、華僑は

中華街、中国街と呼んだ。戦後、韓国は、この地域を善隣洞と呼んだ〔杜 二〇〇一〕。

この頃、朝鮮は、仁川、釜山、元山を開港し、仁川は、中国の上海や煙台（山東）との間で定期航路が運行されるようになった。中国の山東省は黄海をはさんで朝鮮半島と対峙しており、山東半島と朝鮮半島の最近距離は二〇〇キロほどである¹⁰。朝鮮半島が開港されると、中国から多くの出稼ぎ者が朝鮮半島に渡り、一八八六年当時、仁川の華僑人口は二〇五人であった。そのうち山東省出身者は八〇人と三分の一を占めた。

一九一〇年、朝鮮が日本の植民地下に入ると、日本人商人が多数朝鮮半島に進出した。日本の競合相手となる華商に対し経済活動の規制が加えられるようになったといわれている。また、一九二〇年代に入ると、植民地における道路、橋、鉄道、港湾の建設にともない、山東から多くの華人労働者を導入した。現在、韓国華人の大多数は山東系によつて占められているが、地理的に近いことのほか、こうした歴史的背景に由来していることがわかる。

一九三一年、万宝山事件で知られる華人と朝鮮人農民の衝突が発生すると、朝鮮半島中で排華運動が起こった。万宝山とは、吉林省長春から北へ三〇キロほど離れたところに位置する山で、その地の水利権と耕作権をめぐる朝鮮人農民とそこに土着していた中国人八〇〇人あまりが激しく衝突した。両者の衝突の背景には、日本側による両民族の分離政策があった。この事件により、半島内の華人労働者は集団で華人商店に避難し、また帰国する人々も多かった。当時、韓国に七万いたといわれる華人たちは半減し、その後、第二次世界大戦前まで人口の増減が激しかった。

第二次世界大戦後、日本人に代わり華人が韓国の対外貿易を支配するようになった。また、ソウルや仁川など都市郊外で野菜栽培に従事する華人も増加し、韓国経済に多大な影響を及ぼす存在となっていた。しかしその状況も長くは続かなかつた。一九六〇年代、パクチョンヒ政権に入ると、華人移民をターゲットに厳しい政策が施行されるようになった。一九六一年に「外国人土地法」が制定され、外国人である華人の土地取得が禁止された。一九六八年に再度外国人土地法が改定された際、居住用六六〇平方メートル（二〇〇坪）以下、商業用一六五平方メートル（五〇坪）

以下は所有可能となった。こうした土地所有の制限は、韓国華人が経済活動を行うに当たり厳しい規制であり、五〇坪以上の規模を有していたホテルや料理店のオーナーは事実上、事業閉鎖を迫られることとなった。こうした土地所有の制限がなくなるのは一九九七年に入ってからである。外国人土地法以外にも、外貨交換の規制、貿易業の制限などが行われ、どれも華人の経済活動を窮地に追いやった。

こうした差別政策に耐えかね、華人たちの多くは韓国を離れ、台湾やアメリカ、日本などに移住する者が多かった。韓国における華人コミュニティは衰退の一途をたどった。かつて租借地として華人が多く集まっていた仁川も例外ではなかった。近年になり街が再建されるまで、文字どおり韓国は「チャイナタウンのない国」となったのである。

移動を余儀なくされた一家

筆者の調査対象の一人である孫友玉^①の祖父は山東省出身であり、戦前、商売のため韓国に渡った。父を含め七人の兄弟姉妹はみな韓国で生まれ育った。祖父は勤勉に働き一定の貯蓄をためると、中華料理店を経営した。長男であった孫友玉の父孫厳仁は家族が経営する中華料理店の後継ぎとなる予定であった。韓国の国籍法は血統主義を採用しており、しかも、人々には民族≡国民という意識が根強くある。孫厳仁は韓国で生まれ育ったが、韓国人と認められることはありえず、自らも中国人としてのアイデンティティをもっていた。祖籍（本籍）は山東省であるが、韓国に在住する華人のほとんどは中華民国国籍を有していた。それは、中華民国期に韓国に移動した者が多かったこと、また、当時、韓国が国交を有していたのは中華民国（台湾）であり、ゆえに華人の行政手続きを取り仕切る駐韓の組織も中華民国系であったことなどが背景にある。

一九六〇年半ば、孫厳仁が二〇代半ばにさしかかるころ、「外国人土地法」をはじめ、華人に対する規制が厳しくなり、当時家族で経営していた料理店も縮小すべきか、もしくは店をたたむべきかという岐路に立たされた。青年期

にあった孫嚴仁はある女性と恋仲にあった。女性は古いしきたりを持つ家庭に生まれた韓国人である。二人は真面目に交際し結婚を考えていた。孫嚴仁が求婚のため彼女の両親にあいさつに行ったが、女性の父は中国人に嫁がせることに強く反対し二人の婚姻を認めなかった。その当時の社会事情を知る者にとっては予想されることであった。とくに韓国社会は民族意識が高揚しており、外国人である中国人に対する差別観念は強かった。そのような状況下、二人は婚姻をあきらめることができず駆落ちをし、家族のいる韓国を離れた。二人は日本に渡り、一足先に日本に渡っていた韓国華人に海産物の卸をしている山東人の在日華人を紹介され、港町横浜で暮らすことになった。その後、しばらくの間、横浜を拠点に台湾と日本各地を行商していた。

日本、台湾各地を転々としていた孫嚴仁は、安住できる場、起業できる場を探していた。結婚後、二人の娘に恵まれ、子どもたちの学校のためにもその必要があった。一方、孫嚴仁の兄弟姉妹は、七〇年代それぞれ移動を余儀なくされた。嚴仁のほか末の弟が単身で来日したほか、一人の妹は台湾に、そのほかはアメリカに渡った。なかには台湾を経由し最終的にはアメリカに渡った妹もいた。ちょうど、アメリカが移民の宥和政策を行った時期と重なっていたこともあり、韓国で肩身の狭い思いをした華人たちの多くは再移民先としてアメリカを目指した。また孫嚴仁やその妹たちが、移住先として台湾を選んだ者が少なくなつたのは、韓国人が中華民国国籍を有していたという理由がある。故郷は山東省であっても、自分たちの祖国は中華民国政府がある台湾だというアイデンティティを彼らは持っていたのである。

国籍と民族的アイデンティティ

孫嚴仁も台湾に渡ったが、結局よそ者として扱われ、なじむことができなかつた。むしろ外国人として差別されても、それほど憤りを感じない本場の外国である日本を永住の地と選んだ。その際、あえて中華街ではなく日本人が居

住する町で中華料理店を開業した。山東自慢の手打ち麵とギョウザの専門店である。二人の娘は、華僑学校に送り中国語を習得させた。家では妻が娘たちと韓国で会話した。二人の娘は韓・中・日三ヶ国語を習得した。一九九〇年代はじめ、孫友玉が大学を卒業するころ、孫厳仁は大きな選択をすることとなった。娘たちの国籍問題であった。せっかく語学に堪能であつても在日外国人として、日本の企業で就職することは難しかった。国籍≡民族的アイデンティティという意識の強かった孫厳仁と韓国人の妻も、日本国籍を取得することには抵抗があつた。しかし、娘たちの将来を思い家族で帰化を決断した。

「冷静に考えてみれば、アメリカに渡つた妹の子どもたちは、みなアメリカに生まれアメリカ国籍を取得し伸び伸びと育つていた。親のプライドで娘たちの将来を閉ざしてはいけないと思つた」と当時を振り返る⁽¹⁾。

日本国籍を取得した後、孫友玉は一般の日本人には稀に見る韓・中・日の三ヶ国語を自由に操る語学力が評価され、外務省の外郭団体である台湾交流協会で調査員として台湾で働くことになった。その後、台湾で出会つた男性と結婚し、現在は台湾にある語学学校で、日本語と韓国語部門を担当する主任として活躍している。仕事のため、台湾、日本、韓国間を頻繁に移動している。

日本を離れ、韓国、中国へ移動

一九九〇年代に入ると、韓国華人たちにとって韓国社会の状況が一変した。一九九二年、中華人民共和国と大韓民国の国交が樹立すると、政治面だけでなく、経済、社会など各方面で韓国と中国の関係が緊密化した。仁川では、青島や威海など中国各地を往来するフェリーが増便した。中国に進出する韓国企業が増え、中国語のできる華人は橋渡し役として貴重な人材と見直されるようになった。また、韓国人の間では、中国語習得がブームとなり中国語を学ぶ人が増え、なかには中国へ留学する人々もいる。中国に渡つた韓国人をターゲットとした韓国風中華料理店が青島に

は少なくとも、そうした店はしばしば中国に逆流した韓国華人の二世や三世たちが経営している。店では、かつて中国にはなかった、韓国人が好む韓国風の中華料理ともいえる真黒なジャジャン麺（炸醬麵）や赤いチャンボン⁽¹⁵⁾が提供されている。新世代の韓国華人の中国への逆流に伴って中国の中華料理も様相を変えている。

また、一九九〇年代後半、韓国は経済危機を経験した際、IMF（国際通貨機構）から外国資本の投資を勧誘すべきというアドバイスがあった。韓国政府は、経済立て直しのために国を上げて政策に取り組んだ。その際、目玉の一つとなったのが、仁川チャイナタウンの再建・復興プロジェクトであった。仁川チャイナタウンを再建することで、中国からの投資家だけでなく、世界各国にいる華人からの投資を勧誘する狙いがあった。実際一九九九年、世界華商大会がオーストラリア・メルボルンで開催された際、韓国からの代表団は、仁川チャイナタウン再建プロジェクトを大々的に宣伝し、世界各国の華商に投資を呼びかけた。仁川は投資の勧誘のほか、観光客を増やすことで経済を活性化させたいと考えており、チャイナタウンは観光のスポットとして格好の存在となった。

こうした韓国内での動きを受けて、海外に渡った韓国華人のなかに、韓国に逆流する現象がみられる。特に、かつて韓国から日本に移動した人たちに多い。一九八〇年代後半、日本がバブル経済であった時期に来日した韓国華人のなかには、景気が悪くなったまま回復の兆しがない日本の経済や、一〇年近く暮らしてもなかなか居住権が安定しない日本に見切りをつけ、韓国に戻った者がいる。現在、仁川チャイナタウンでレストランを経営している范延年は、十数年新宿で働いていた。一方、堪能な日本語を話し、大阪、東京などの貿易会社で働いたという李智民は、日本を離れ韓国に戻った。現在、中国と韓国を往来し貿易を行い、仁川チャイナタウンで中国物産店を経営している。范と李に共通していることは、一九八〇年代にいったん日本に移住したが、一九九〇年代終わりになって再び韓国に戻ってきたという点だけでなく、子どもたちをアメリカに留学させていることがあげられる。彼らが日本にいた十数年の間、妻と子どもたちは韓国に残ったまま祖父母とともに生活し、男性が単身で出稼ぎにいくという形で別々に暮らし

ていた。現在、大学生となった子どもたちは、アメリカへ留学しているが、今後、韓国にもどるのか、もしくは中国か、それともそのままアメリカに根を張るのか、まだ分からないそうだ。韓国華人の新しい世代がどのような選択をするのかは注目に値する。いずれにせよ、彼らが日本ではなく移動先をアメリカにしたという点は、父の世代が日本に見切りをつけたことが影響しているといえそうである。

4 まとめにかえて

アメリカ、香港、韓国の華人家族の移動のあり方とその目的を、歴史環境の変遷にそってみてきた。まず、移動の目的を地域レベルで比較してみると、以下のような特徴があげられる。

(1) (移動の目的) まず移動のパターンとして、**①**アジア間の移動、**②**北米からアジアへの移動、そして、**③**アジアから北米への移動がみられる。

① アジア間の移動

中国から香港、韓国から台湾や日本など、アジアの間を移動するという動きは、一世や二世の間に多く見られた。目的は、商売や仕事の獲得のため(華工型・華商型)、そして、政治的混乱から逃れるため(華僑型)という特徴がある。また、韓国出身の華人は、香港出身の華人が欧米を目指す傾向が強いのに比べ、台湾や日本などアジア間を移動するケースが比較的多く見られるという特徴がある。

② 北米からアジアへの移動

アメリカやカナダなど、北米に移動した華人のなかには、アジアに再度移動している者がいる。なかでも特に二世や三世の華人が多いが、彼らがアジアに逆流する目的は、ビジネスの拡大(華商型)、やりがいのある仕事を得る(華

裔型)、白人社会に生まれたアジア系としてアイデンティティ探し(華裔型)などがあげられる。なお、一世や高齢となった華人に見られるアジアへ逆流する動きは、親族や友人との再会、慣れたところで老後の生活を送りたいという理由があげられる(華僑型、華裔型)。

◎アジアから北米への移動

華人の間で、近年もつとも多く見られたのは、アジアから北米へ移動するという動きである。戦前は仕事を得るため(華工型)が多かったが、戦後になり中国大陸、香港、台湾における政治的、社会的の緊張感がおさまらない一方で欧米は比較的安定しており、かつ移民に開放的であったため、市民権取得(華裔型)、子供の教育・家族の生活(華裔型)、医療福祉(華裔型)を目的に北米に移動する者がいる。また、留学(華僑型)のために渡ったが、のちに定住して行く者も多い。

(2)〈世代別移動の特徴〉 家族に注目し、世代間に見られる移動のあり方を比較してみると、以下のような傾向が見られた。まず、第一に、上にみた移動のあり方において①のアジア間の移動をした親の元に生まれた次世代は、◎アジアから北米へ移動をする傾向にあること。

第二に、上にみた◎アジアから北米へ移動した親の元に生まれた次世代は、③北米からアジアに移動する傾向にあること。第三に、④北米からアジアに移動した者は、現在三〇代から四〇代の華人に多く、彼らの次の世代が自らの意志でどのような移動を選択するかは、あと一〇年ほど観察する必要がある、その動きは注目に値する。

本論で紹介した調査対象や紙面の関係から、アメリカ、韓国、香港の事例の比較のみにとどまったが、実際、華人は世界各国に散在しており、その移動のあり方も複雑である。しかし、限られたデータといえども、ここから、華人の移動のある種の法則や特徴といえるものが見えてくるように思われる。それは、華人たちが、市民権や教育を求め

る際は、欧米に移動することが多いのに対し、ビジネスや仕事の獲得のためには、アジアに移動する傾向にあることがまずあげられる。また、華人たちは世代に関係なく、総じて頻繁に移動しており、家族が国境を越えて分散するとに抵抗が低いこともあげられよう。そして、国籍や市民権の取得とアイデンティティに関してみると、国籍とアイデンティティは一般的に「別のもの」と考えており、国籍や市民権はあくまでも保険や便宜と考えている。これは世代を通して大きな差異はなく、むしろ、地域的な差異があるように見られる。つまり、欧米（カナダ、アメリカ）の国々に移動したものは、国籍と民族の関係をよりドライに考えているが、アジア（韓国、日本）に移動したものは、欧米に比べ保守的な傾向がみられ、国籍とアイデンティティを同一のものとしてとらえる傾向にある。華人たちのこうした違いが、世代よりも出身地の違いにみられるのは、移動先国の法制度や移民政策の影響がある。

当然のことであるが、人は安全なところ、そして景気がよいところに集中する。現在、アメリカや日本、韓国などの景気は芳しくなく、一方で中国の経済成長が著しい。すでに見たように、中国に逆流する華人が増えている。これから華人の間で、どのような移動が繰り返られるのであろうか。また、逆流した華人を中国はどのようにうけとめるのであろうか。市民権の取得や国の景気を見計らって、移動する華人たちの動きはたくましく、かつしたたかな一面がある。そんな移動を繰り返す華人を国家がどのように掌握するのか、また彼らにとって国家とはどのような存在なのか、彼らの移動を通して国家と人の関係を再考すべき段階にきているように思う。

注

(1) このほかにも、中国系の移民を表す用語には華裔、唐人、海外華人、華工、華商などいろいろあるが、華僑・華人がもつとも一般的である。

(2) 『越棉寮報』は、アメリカに移住した越（ベトナム）、棉（ミャンマー）、寮（ラオス）出身の華人向けの華字新聞である〔吉原二〇〇二〕。

- (3) 本論ではブライバシー保護のため、ケーススタディーで紹介する人々は、一部仮名を使用する。
- (4) 一九九九年、香港におけるラリー氏へのインタビューにて。
- (5) ラリーは、中国大陸、香港、台湾を一括しグレートチャイナ (Greater China) と呼び、祖父の祖国と考えていた。
- (6) 麥禮謙「麥一九九二」、スケルドン [Skeldon 1994] なども返還問題は香港から多くの移民を送り出したと指摘している。
- (7) 一九九九年一月、香港における程萬心へのインタビューにて。
- (8) 一九九九年一月及び二〇〇八年五月香港における程一家へのインタビューにて。
- (9) 二〇〇九年八月、カナダ・モントリオールにおける麻へのインタビュー。
- (10) 筆者は二〇〇八年三月に調査を行った際に、実際仁川から船で青島まで渡ったが、夕方船に乗り込み次の朝早くには山東側に着し、波もとても穏やかであった。もちろん、現代と百年前では船の規模も技術発展の度合いも大きく異なるため科学的な比較は不可能であるが、黄海をはさみ朝鮮半島と山東省が対峙するという地理的關係は変わっておらず、この両地域を往来する人が多いこと、そして密接な關係が保たれているのは当然の成り行きであると思われる。
- (11) 二〇〇七年一月、台湾におけるインタビュー。
- (12) 二〇〇七年三月、横浜におけるインタビューにて。
- (13) 赤いチャンポンとは、韓国独特の中華料理であり、肉・海鮮・野菜などいろいろな食材の入った麺である。長崎に見られるチャンポンの汁は白いが、韓国は唐辛子を入れていたため汁は赤い。

参考文献

- 伊秀一 二〇〇五「韓国—中国語ブームと韓流のなかで」(山下清海編『華人社会がわかる本』明石書店)
- 王廣武 一九九一『中国與海外華人』商務院書館
- 朱炎 一九九五『華人ネットワークの秘密』東洋経済新報社
- 僑務委員会編 一九九一『華僑經濟年鑑』僑務委員会
- 賈海涛・石滄金 二〇〇七『海外印度人与海外華人國際影響力比較研究』山東人民出版社
- 李安山 二〇〇〇『非洲華僑華人史』中国華僑出版社
- 李原・陳大璋 一九九一『海外華人及其居住地概況』中国華僑出版公司

- 李勝生 一九九二『加拿大的華人與華人社會』三聯書店
張勇・陳玉田 二〇〇二『香港居民的国籍問題』三聯書店
杜書溥 二〇〇一『仁川華僑教育百年史』（出版社不明）
陳天璽 二〇〇一『華人ディアスポラ―華商のネットワークとアイデンティティ』明石書店
馮子平 一九九三『海外春秋』商務院書館
麥禮謙 一九九二『從華僑到華人…二十世紀美國華人社會發展史』三聯書店
楊昭全・孫玉梅 一九九一『朝鮮華僑史』中國華僑出版公司
山下清海 二〇〇一『韓國華人社會の変遷と現状―ソウルと仁川の元チャイナタウン中心に』（『国際地域学研究』第四号）
吉原和男 二〇〇二『多様な中国系アメリカ人』（『アジア遊学―特集 移民のエスニシティと活力』三九〈特集 移民のニスニシティと活力〉 勉誠出版）
Skeldon, R. (ed.). 1994. *Reluctant Exiles? Hong Kong: Hong Kong University Press.*
Ma, Laurence J.C. & Cartier, Carolyn. (eds). 2003. *The Chinese Diaspora: space, place, mobility, and identity*. Lanham, Md.: Rowman & Littlefield.
Wang, Larry 1998. *New Gold Mountain: The Success of Chinese American in Greater China*. New York: Mass Market Paperback.